

RECLAMING ISHIGAKI YAEYAMAN: A TRANSDISCIPLINARY EXPLORATION OF IDEOLOGY AND PRACTICE

八重山語の再生：イデオロギーと実践の学際的探究

NINJAL合同研究発表会 2024.06.15（土）

MATTHEW W. TOPPING（トッピング・マシュウ）

国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員兼

琉球大学大学院人文社会科学研究科 博士後期課程在籍

本発表の目的:

言語継承活動の取組みの概要と課題点を述べると共に、研究協力者に対して行った半構造化インタビューで抽出したテーマと八重山語習得の関係性を探る。

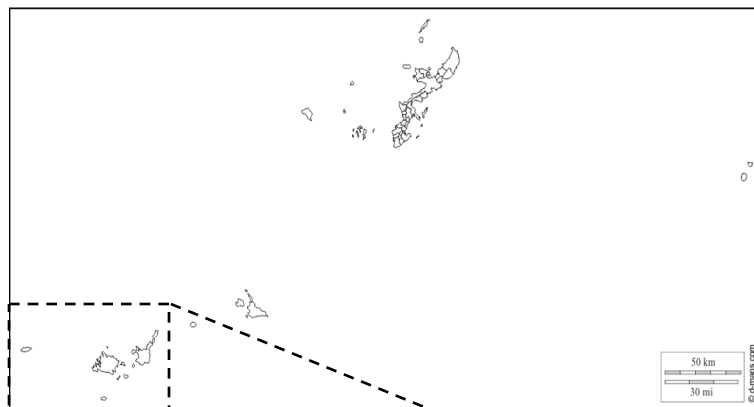
調査結果（抽出テーマの提示）と改善点の検討

本発表の流れ

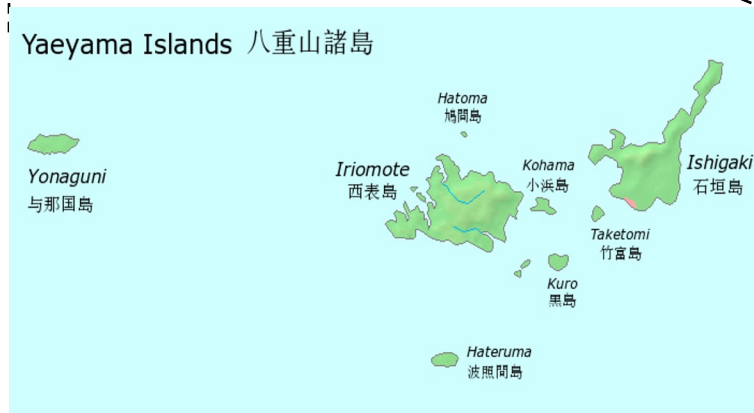
1. 八重山語石垣島四箇方言とその消滅危機の背景
2. 研究パラダイム（PAR）
3. マスター・アプレンティス（MAP）継承活動の背景
4. データ収集方法および抽出テーマ（インタビュー抜粋）
5. 石垣島MAPの特徴およびインパクト
6. まとめ

1. 研究对象地域：石垣市「四箇字」地区

沖縄県



八重山諸島



(西部から: 字新川, 字石垣, 字大川, 字登野城)



地図データ: DigitalGlobe, SIO, NOAA, U.S. Navy, NGA, GEBCO

2.1 研究パラダイム

Purpose (研究目的) :

本研究では、研究参加者のユニークで個人的な経験を基に（1）石垣島で生活する人々の持つ言語意識および（2）地元の継承言語である「すまむに」（八重山語）の再活性化のための実行可能な方法についての理解を生み出す。

Epistemology (認識論) :

知識とは、研究者もその一部である宇宙に属するものであり、常に交渉され議論されているものである（オントロジー）(e.g. Wilson, 2008; Kovach, 2014)。本研究の成果となる知識は、研究参加者の石垣市民と一緒に生み出したものであり、その恩恵を受けるのも、最終的には研究参加者なのである。

Methodology (方法論) :

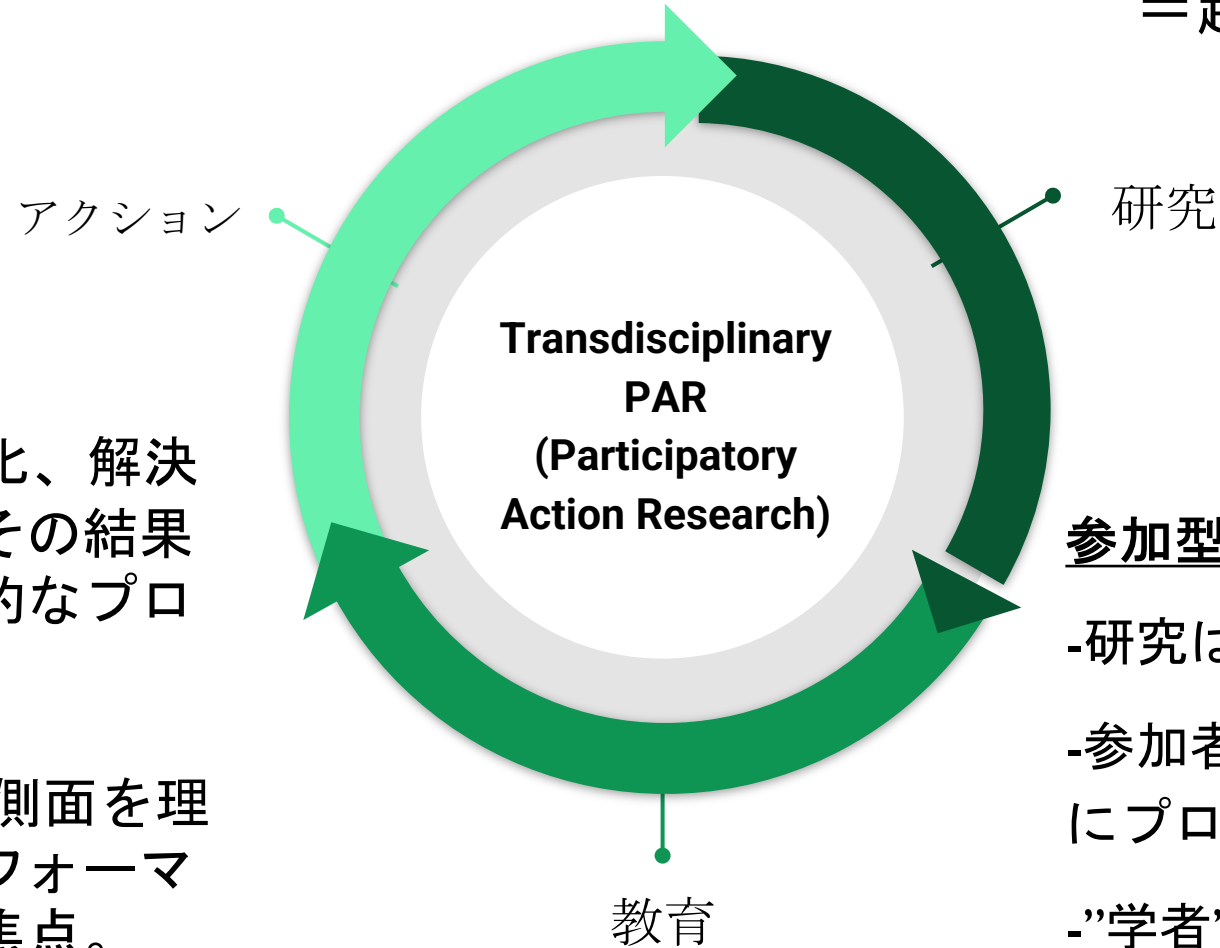
少数言語の危機的な状況に変化を働きかけることのできる参加型アクションリサーチを用いる。

2.2 学際的参加型アクションリサーチ

(Filipović, 2019)

“transdisciplinary”

= 超域的、学際的



- PAR は、問題の明確化、解決策を考えて行動し、その結果の評価といった周期的なプロセスに基づく。
- 知識の創造の複雑な側面を理解するために、インフォーマルな場面での学びに焦点。
(Kapoor & Jordan 2009:8)

参加型アクションリサーチ (PAR)

- 研究は、研究者の所有物ではない。
- 参加者が主体となって研究者とともにプロジェクトに参加する
- ”学者”でない参加者との協働

Context

- Language Shift from Ryukyuan to Japanese
- Uchinaa-yamatoguchi (Okinawan Japanese) spoken by younger generations (Anderson, 2009)

Fluent Speakers

- 70s and older (depending on areas of different island communities, it varies)

Rusty Speakers

- 50s-60s and older
- Cod-Switcher of Okinawan-Japanese and Okinawan

Semi Speakers

- 40s-50s and older
- Passive Bilingual (preferable term)

Non- Speakers

- 30s and younger
- Their dialect is closer to Tokyo variety of Japanese

New Speakers (新しい話者)

- While Indigenous language learning is often associated with historical trauma, pain, and a feeling of loss, language reclamation can kindle positive emotions (Grenoble and Whaley, 2020; Hornberger, 2006; Olko et al. 2022).
- Similar to other contexts where younger people learning Indigenous languages.....: young learners and speakers of Indigenous languages tend to experience **linguistic insecurity** because their speech, which often changes with time and mixes with dominant languages, tends to be negatively evaluated by older speakers (Abtahian et al. 2017; Hammime & Zlazli, forthcoming).

Beyond “deficit” thinking and coloniality...

- Deficit thinking and coloniality behind “nativespeakerism” (Tupas, 2022), “semilingualism” (Karlander & Salö, 2023).
- New speakers are those who relate to and make regular use of a language that is not their first language, or the predominant language used within the household as they matured (O’Rourke, Pujolar & Ramallo 2015; O’Rourke & Nandi, 2019)
- 敬語の習得（文法面）、empathy「共感」役割、使用領域とsafe space、純粹主義とnative-speakerism

3. MAイニシアティブ 「わたしたちのすまむに」

- 当初は2017年に検討し、後に石原昌英（琉球大学）ズラズリ美穂（ロンドン大学SOAS）、半嶺まどか（名桜大学）との相談後、挑戦することを決定
- マスター・アプレンティス語学学習モデルに基づいている：カリフォルニア州において言語復興支持団体であるNGOカリフォルニア先住民族言語擁護会(AICLS)と協力し、Leanne Hinton博士によって設立される
- 青年(20代～30代)とその地域の継承言語に堪能な方にペアを組んでもらい、決められた時間を一緒に過ごし、絆を深めながら対象言語でコミュニケーションを図る活動である（Hinton 1997）





現在のプログラム 進捗状況

二つのチームが活動中:

- チーム新川 (マスター1名・コーディネーター1名・アプレンティス3名)
- チーム石垣 (マスター1名・コーディネーター1名・アプレンティス3名)

❓ MAの適用は、地域のスピーチコミュニティが持つ特定の要求に対応できるような柔軟性を持つべきであり、また、その地域の伝統的なプロトコルに従うべきである。(Olawsky, 2013:60)

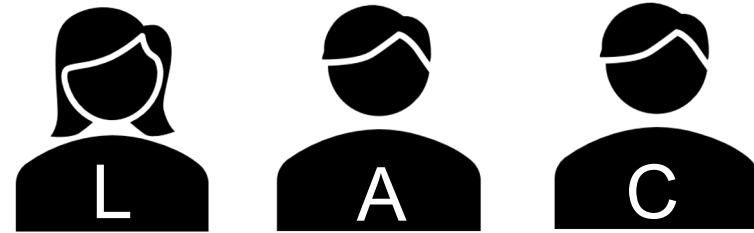
ADDITIONAL TEAM INFO

新川（あらかー） 開始から4年7ヶ月



- ほぼ月1回のセッション、ソーシャルメディア（LINE）によるスマムニの使用
- D (1960, 女) 職場でお客様や同僚とスマムニで会話するようになった
- B (1961, 女) 急速なコードスイッチングが可能に
- K (1968, 女)
- X (19xx, 女) 八重山探検隊として独自の活動を有する

石垣（いしやなぎら） 開始から満4年



- 月1回のセッション、ソーシャルメディア（LINE）によるスマムニの使用
- L (1949, 女) 急速なコードスイッチングが可能に
- A (1956, 男) 沖縄本島にルーツを持ち、混交言語／クレオール言語の母語話者である
- C (1985, 男) 歴代地域青年会会長、石垣青年団協議会会長、生まれたばかりの娘に教えたいとのこと

Methodology

- Inspired by participatory and Indigenizing methodologies (Chilisa, 2012, Smith, 1999)
- 3 linguists, 24 participants
- Data produced in workshops (2023): group sharing with language portraits, drawings, artifacts.
- Analysis: ongoing during data collection, sharing back, open and focused coding (Madoka and 2 co-researchers)



5. 伝統的な話者：三つのタイプ (表3)

(Hammime 2020)

Type 1

新しい話者の間違いを教えてくれるとともに、それを否定せず、言語使用を奨励する。

新しい話者にとって、その言葉の学習を力づける。(モチベーションアップ)

Type 2

新しい話者が言語を学ぼうとしていることをほめるが、話すときはすべて標準語

対象言語でもっと話したい、練習したい新しい話者にとって、練習ができない。

Type 3

新しい話者に対して、あなたは若いから何もわからない、間違いだらけだと指摘する。

新しい話者にとっては、このタイプの指摘を受けると、モチベーションが下がり、話すことや学習することが不安。

敬語と社会的エチケット

- ・ 石垣市では、高齢者への敬意や明確な意思疎通の必要性などが社会的エチケットとして挙げられる。戦後数10年間にコミュニティの世代間継承が途絶えてしまったため、本調査の時点で75歳以下の地域住民は敬語を身につける機会がなく、rusty speakerやsemi-speakerとなった。高齢者に対する丁寧な言葉遣いが出来かねる彼らは、八重山語をある程度理解できても、敬語を用いない「やぶれスマムニ」を目上の人に使おうとしても口を噤んでしまう。

現代社会における役割

- ・ 本取り組みの参加者の中には日常生活のあらゆる領域に八重山語を導入するのは不適切だと考える人がいれば、職場など使用領域を増やそうとする人もいる。また、伝統行事や自治会集会などかつては広く使われていた社会的文脈において、八重山語を練習し、聞き、話す機会が減少。それでもどの世代にも八重山語は自分の地域の文化やアイデンティティの重要な一部であると主張する人たちがいる。

習得と使用上の課題

- ・ 本取り組みの協力者は、Master-Apprenticeという言葉習得の手法をそれぞれの社会的文脈に適応させていく中で、一方では言語習得に関する課題に、他方では使用に関する課題に遭遇する。取り組みの協力者は全員、第2言語習得のためのフォーマルな教室環境に慣れているため、MAのインフォーマルで分散的な性質には馴染みがない。

4. 抽出テーマ：「破れすまむに」と言語習得

4.1

“小さいときはばあちゃんが同居してたので、家の中はずっと方言——方言というか「すまむに」でした。私は聞くことができたんですけど、小さいときは。...おばあちゃん達の会話を耳にしているのは同等の、敬語とかじゃない会話なので...だいたい、しゃべるときは目上の方に使う敬語じゃないので、つい出さなくなってしまった。お友達同士とか気の置けない仲間では、しゃべろうと思えばできるんですけど、まあ「破れすまむに」ってよく冗談で言ってるんですけど、...ちゃんとした「すまむに」を話すというのは自信が無いので、しゃべらなくなりました。”2020.07.06B氏（女性・アプレンティス）

4.2

例えここで「これはこうだ」と言ったとしても、教科書の一頁の一行のようにすぐ忘れてしまうんです。それでね、以前に市会議員してる○○○さん、彼が青年会の会長をしている時に「シママニを継承したい」と言うことで、青年会に何人か集まって私が何度か講師になって行ってたんですよ。それで、私が「じゃあ、これこれ言ってごらん」と言ってみたら、流れ、イントネーション、置き所が違うんですね。「あん達どこの子なの？」と言ってみてね、「他県人が言っているようなアレじゃないか〜」と、で、○○のおばあちゃんが私より1年歳若い人だから、「あんたの家のおばあちゃんは、お家ではスマムニをなさらないの？」と訊いたら「いや」と言うから、「それはおばあさん悪いねえ」って。やっぱり、こうしてね、黒板でノートを取って勉強するものではなく、生活の中で「言葉」というのは口から耳に、自然に心得ていくものであるのにねえ、「それをいちいちノートに書いたり、黒板に書いたりというようなことで、スマムニというのはアレできないよ」と言ってみて、言ったことがあるんです。20.07.03 F氏（女性・マスター）

4.3.1

“今ぬ若さーる者やよー、「しじゃ・うとうどう」であまり分がらんさー...
敬語で一使いぶさんばんらー。「先輩後輩分かって、モノ言えよ！」って
言いたいさ。

4.3.2

“「しじゃ・うとうどう」や別にしーってよー、まず覚いくとう。...うぬまま「あんじ
どー」であんくすどうますあらぬ？まずスナムニゆよー、8割程度、自分ぬ物なして
、後から敬語を使うことは簡単。” 2021.02.12G氏（男性・マスター）

4.4

私は、○○さんに敬語は使わないでいいって言われた。○○さんが、敬語は、難しいから、今はとりあえず、普通にしゃべっていいよ、っていわれて、今は、敬語とか気にせずに今は、しゃべっています。自分も、敬語しゃべるのは最終的な目標だよ。でも、敬語、普通にしゃべれないと、敬語もしゃべれないから。今は、敬語とか意識していないね。2021.02.03 C氏（男性・アプレンティス）

6. まとめ

1. 現在2つのチーム（計10名）がマスター・アプレンティス語学学習の手法で言語継承活動に取り組む
2. 本取組みの形式は、従来のマスター・アプレンティスとは異なり「1対1」ではなく、少人数のチームで行うものである（先行研究でも似た事例あり）
3. 敬語・自然なイントネーション等の習得 → 手法の応用に問題か？
4. スマムニを話す意義・まりずま（故郷）に対する思いを認めた言語レパートリー変化の評価基準 → 望ましい

結論

- 浮き上がってきた課題 (1) 言語を生産的に使用することの難しさ (2) 言語意識に関する難しさ (3) トップダウン的な言語習得方法
- このマスターアプレンティスプログラムで学ぶニュースピーカーには、日本の学校教育で教育を受けてきたためか、トップダウン的な学習法で学び続ける傾向がある。→本来の、MAPの学習方法とは異なる。
- 学習者は、自分の生み出すすまむに（破れスマムニ）が間違っていると認識し、それをネイティブスピーカーから指摘される。
- 学習者が生み出すスマムニは、間違いだらけで、失礼なことばだと指摘され続けると、学習者のモチベーションに影響する。→Trauma-informed-approach (Kono & Switzler, 2021)
- Filipovic (2019)の言葉を借りれば、参加者自身が主導する、複雑で、適応可能な活動の場が、生まれつつある。“the creation of a self-organized, complex, and adaptive community of practice”

結論

1. 敬語の習得を助けるための方法論（人形を使ったロールプレイなど）
2. 言語教育の分野から、ネイティブスピーカーが自信を持って教えらる教育が必要。→**教員養成トレーニングの必要性**
3. マスターの中には、敬語が難しいことを認識し、それが使えなくてもいいと考える人もいる。→**それを学習者に伝える場所**が必要。

伝統的話者が新しい話者と対話する環境と場面

言語態度・言語意識の変容を促す場所（**Safe Space**を創る）

参考文献

1. Anderson, Mark (ed). (2014). *Language Crisis in the Ryukyus*. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars.
2. Anderson, Mark R. (2009). *Emergent Language Shift in Okinawa*. Sydney, Australia: University of Sydney.
3. Stringer, Ernest T. (2014). *Action research*. Fourth edition. Thousand Oaks, California: SAGE.
4. Filipović, J.(2019) Transdisciplinary qualitative paradigm in applied linguistics: Autoethnography, participatory action research and minority language teaching and learning. *International Journal of Qualitative Studies in Education*, 32(5), United Kingdom.
5. Hammine, M. (2020). Educated Not to Speak Our Language. *Journal of Language, Identity and Education*. <https://doi.org/10.1080/15348458.2020.1753200>
6. Hinton, L., Vera, M., & Steele, N. (2002). *How to keep your language alive: A commonsense approach to one-on-one language learning*. Berkeley, Calif.

参考文献

7. Kapoor, D., & Jordan, S. (2009). Introduction: International Perspectives on Education, PAR, and Social Change. *Education, Participatory Action Research, and Social Change: International Perspectives*, Palgrave Macmillan, 283, New York.
8. Kono, N. & Switzler, V. (2021). *Healing/Trauma Informed Approach in Language Documentation Process*. A Presentation at ICLDC International Conference on Language Documentation and Conservation. University of Hawaii.
9. Kovach, M. (2005). Emerging from the Margins: Indigenous Methodology. In L. Brown & S. Strega (Eds.), *Research as Resistance: Critical, Indigenous, and Anti-Oppressive Approaches*. Toronto: Canadian Scholars' Press.
10. Kū Kahakalau (2017) Developing an Indigenous proficiency scale, *Cogent Education*, 4:1, 1377508, DOI: 10.1080/2331186X.2017.1377508
11. McCarty, T. Nicholas, S., Che, K., Diaz, N., Leonard, W. White, L. (2018). Hear Our Languages, Hear Our Voices: Storywork as Theory and Praxis in Indigenous Language Reclamation. *Dædalus, the Journal of the American Academy of Arts & Sciences*. 160-172. https://doi:10.1162/DAED_a_0049

参考文献

12. Moon, K., & Blackman, D. (2014). A Guide to Understanding Social Science Research for Natural Scientists: Social Science for Natural Scientists. *Conservation Biology*, 28(5), 1167– 1177. <https://doi.org/10.1111/cobi.12326>
13. Olawsky, K. J. (2013). The Master-Apprentice Language Learning Program Down Under: Experience and Adaptation in an Australian Context. *Language Documentation & Conservation*, 7, 41–63.
14. Wilson, S. (2008). *Research is Ceremony. Indigenous Research Methods*. Manitoba: Fernwood Publishing.